

研究ノート

## スポーツ・ボランティアから得た学びと課題

—1998年長野パラリンピックに学生ボランティアとして参加した増田大樹氏のインタビューから—

浦 佑 大 (日本体育大学 体育学部)  
依 田 充 代 (日本体育大学 スポーツマネジメント学部)  
波多腰 克 晃 (日本体育大学 スポーツ文化学部)  
清 宮 孝 文 (静岡産業大学 スポーツ科学部)  
齋 藤 雅 英 (日本体育大学 スポーツ文化学部)

### はじめに

ボランティア活動に参加することで、1) 身体的、精神的、感情的にも健康に感じることに、2) ストレスを管理し、低減させることに有効であること、3) コミュニティや他者との繋がりをより強く感じること、4) 健康についてより多く知識を持っており、自分自身の健康管理にも注意を払っていること、5) 持病に対してより適切に向き合うことができたり、抱えている悩みから気持ちをそらしたり、和らげたりすることができるなど、多くの効果が期待できる (United Health Group, 2013)。それは、スポーツイベントにおけるボランティアでも同様であると考えられる。1980年代以降、市民マラソンや日本プロサッカーリーグの登場により、全国各地でスポーツイベントが開催され、一般市民がボランティアとして大会運営に参加するようになった。特に注目を集めたのは1998年の長野オリンピック・パラリンピックであり、そこでは35000人ものボランティアが活躍した (山下・行實, 2015)。スポーツ・ボランティア研究の動向をまとめた山下・行實 (2015) のレビューでは、「何故スポーツ文化の成立にスポーツ・ボランティアが必要不可欠なのか」という問いに対して「スポーツからのボランティアに関する研究の必要性」と「体験の意味を問う研究の必要性」を提示している。したがって、スポーツ・

ボランティア経験者を対象とした研究を実施し、知見を蓄積していく必要があるだろう。

そこで本研究では、第7回パラリンピック冬季競技大会 (以下、「長野パラリンピック」とする) 開催時にスポーツ・ボランティアとして参加した増田大樹氏 (以下、「増田氏」とする) の語りから、「スポーツ・ボランティアから得た学びと課題」について検討することとした。

なお、インタビューは日本体育大学倫理審査委員会の承認 (承認番号: 020-H091) のもと、2020年12月14日に実施された。

### 1. 増田氏が長野パラリンピックにスポーツ・ボランティアとして参加するまで

まずは増田氏の経歴を整理したい。増田氏は、1994年に体育スポーツ系大学である日本体育大学に入学した。大学では部活動に所属せず、レクリエーション研究会というサークルに所属していた。大学を卒業後は、総合体育研究所と呼ばれる体育指導員の派遣会社に6年間勤務し、その後は小学校受験を控える子どもたちに運動を教える幼児教室に16年間勤め、現在は教室長を担っているとのことである。

増田氏は、大学4年時にレクリエーション研究

会の顧問であった野村一路氏から「なあ、行かないか」と声をかけられことがきっかけとなり、長野パラリンピックヘスポーツ・ボランティアとして参加することとなった。加えて、レクリエーション研究会は、代々障がい児に関する仕事やボランティア活動を行っていた。増田氏も障がい児のボランティア活動に携わっており、その活動の一環として関連する資格を取得していたこともボランティア参加への決断を後押ししたという。

小学校や中学校の、今でいう特別支援学級の宿泊学習とかについて行って、そこでちょっとゲームをやっけてあげたり、一緒に山、登ったりというお手伝いをさせていただいたっていうのがあって。

サークルの活動の一つとして名称が合ってるか、身体障がい者スポーツ指導員っていうものを在学中に、講習に伺わせていただく機会がありまして、そういったようなところ、せっかくね、得たもの、これほど生かせる大舞台はないだろうと。

しかし、長野パラリンピックのボランティアに参加することで大学生の一大イベントである卒業式に参加できないという現実があり、迷いもあったと振り返る。

実際卒業式も出れなかったですから、ちょっと迷ったんですね。気の知れた仲間と一緒に卒業式を迎えたいっていう気持ちもありましたし。ただちょっとね、何年も前の話なんですけど、自分で本当にそうはあっても、いろいろ切り捨てなきゃいけないものの中でも、最終的にいきたいっていう気持ちになったんだと思うんですが。

結果として、レクリエーション研究会からは合計で10名程度が参加したものの、4年生から参加したのは増田氏のみであった。

## 2. 長野パラリンピックにおけるスポーツ・ボランティア

増田氏は、アルペンスキー会場の担当であった。パラリンピックのアルペンスキーは、障がいの程度によって、立位、座位、視覚障がいの3つのカテゴリに分かれて実施される（小林，2018）。増田氏はチェアスキーを用いる座位カテゴリ選手のサポートを行っていたとのことである。

アルペンスキーの選手は、ゲレンデのふもとからリフトに乗ってゲレンデ上部にあるスタート台に向かう。ゲレンデのふもとから上部まではリフトが運んでくれるが、リフトを降りてからスタート台までは自力で向かわなければならないため、リフトの降車場からスタート台まではガイドとしてワイヤーが張ってあったという。増田氏は、ゲレンデ上部でリフトを降りた選手の誘導係を担っていた。

チェアスキーは不安定であることに加え、張ってあるワイヤーも簡易的であった。ボランティアは「尽くす」というイメージがあった増田氏は、「助けなきゃ、やらなきゃ」という思いから、選手たちを積極的にサポートしていたが、

助けてくれなくていいってある選手に言われたんですよ。-中略- その方はつかまって乗車してくんですけど、やっぱり簡易的なものなので、横にばたんと倒れられたりして、ぱっと行って起こさなきゃっていう、それが自分の仕事みたいなところがあるんですけど、自分でできるから助けてくれるなど、かたや助けてありがとうって言うてくれる人もいる。難しいなって思いましたね。

増田氏のサポートに対して好意的に受け取る選手がいた一方で、そうではない選手もいたようである。この出来事をきっかけに、増田氏のボランティアに対する考え方が変化することとなる。

### 3. 増田氏のボランティア像の変化

長野パラリンピック中にとあるアルペンスキー選手からサポートを拒否されるまで、増田氏のボランティア像は、

助けなきゃ、やらなきゃっていうような、ボランティアっていう、私のイメージですよね。やる、尽くすといったようなところがあった。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課（2007）は、ボランティアについて「明確な定義を行うことは難しいが、一般的には『自発的な意思に基づき他人や社会に貢献する行為』を指してボランティア活動—後略—」としており、増田氏の「助けなきゃ、尽くす」といったボランティアのイメージは、定義に照らし合わせても「貢献する行為」として合致しているように思われた。しかし、サポートの拒否を通じて、

そこから助けるとか何かっていうような概念から、結局ボランティアって、災害であってもこういうオリンピックであっても、それは一つの何か自分が関わってきたいっていう手段の一つであって、やっぱり人と人が何か関わるようなところ、ここになんか意味があって、お互いがいい形でその時間を過ごせたらいいのかなっていうふうにちょっとそんとき思いましたね。

相手がどういうことを求めているかっていうようなところをまず第一に考えないと。私は少なくとも順番が逆でした。こういうことやってやろう、こういうことやろう、要するに自分勝手でした。ボランティアの意識が。でもやっぱりどうしてもraitたいのかっていう、そこの入り口から入るべきだったなっていうのが、ちょっと思うところなんですよね。

増田氏は「助けたい」という思いで選手のサポートを行っていたが、それは自分主導の行為であっ

たと気付く。第一に考えなければならないのは「相手がどのようなことを求めているか」であり、相手のニーズに合致したサポートができて初めて「ボランティア」になるとの考えに至ったのである。

また、パラリンピック会場で実際にスポーツ・ボランティアとして従事していたからこそその気づきもあったという。

パラリンピックという大会でしたから、テレビには見えない、こういういろんな人の支えがあって成り立ってるっていう単純にそこにはすごくびっくりしましたね。テレビとか見ると、この舞台裏にはきつとこういう人たちが活躍してたりとか、目に見えないところであるんだろう、そういう角度で、オリンピックとかサッカーのなんかとか、そういう試合とかっていうのを見る感覚になった。

35000人ものスポーツ・ボランティアが活躍したといわれる長野パラリンピックであるが、ボランティアの活躍がメディアでフォーカスされることは少ない。しかし、増田氏は現場で従事していたからこそ、スポーツイベントは舞台裏にいる様々な人々によって支えられているということを経験できたのであろう。スポーツ・ボランティアを経験した大学生の学習成果として「スポーツ観の変容」と「価値観の拡大」が得られることが報告されている（常浦ほか、2016）。増田氏に関しても、長野パラリンピックのスポーツ・ボランティアを通じて、自分主導ではなく、相手がどのようなことを求めているかを第一に考えるべきという「価値観の拡大」、舞台裏で支える人々によってスポーツは成り立つという「スポーツ観の変容」を成果として得られたのではないだろうか。

### 4. 長野パラリンピックを終えて

長野パラリンピックを通して、自己の価値観に

ついて再確認できたという。

自分は誰かに何かを教えたりであるとか誰かの力になることが、本能的に好きなんだというか、それは再確認できましたね。

そして、長野パラリンピックでの経験が仕事にも活かしているとのことである。

やっぱり相手を見るというか、あの経験によって、仕事においても自分本位ではなくて、相手に合わせる。本当に振り返ってみると学生時代までは、本当に自分がやりたいようにただやってただけっていうようなところがあるんですけど、少し相手に合わせた形、ちょっと間を開けるといってそういう感覚にさせてくれた。

しかし、長野パラリンピック後、別のボランティア活動に参加することはなかったと振り返る。

中には、会社、休んでまで行くっていうような形だったり、会社が理解してくれればっていうところもあると思うんですけど、学生のときは、その優先順位がボランティアに向けても支障なかったんでしょけど、今どうしてもそれを第1位にしてしまうと、もっと違うところがおろそかになるっていうことがね、やっぱり懸念されてしまうので、なので、今はやってないっていうのが答えではあります。

内閣府（2020）が実施した「市民の社会貢献に関する実態調査」の令和元年度報告書では、ボランティア活動への参加の妨げとなる要因について「参加する時間がない（51.4%）」が最も多く、「参加するための休暇が取りにくい（28.3%）」が3番目に多いという結果であった。さらに、厚生労働省（2021）によると、近年は、社員のボランティア活動への参加を後押しする「ボランティア休暇」を採用する会社も見受けられるが、その導入率は

7.5%にとどまっている。

## おわりに

増田氏は長野パラリンピックにおけるスポーツ・ボランティアを通してかけがえのない経験とともに、「スポーツ観の変容」と「価値観の拡大」を得ることができた。さらに、大学卒業後も当時のボランティア経験が仕事場面で活かしていると語っていた。しかし、社会人になった後のボランティア参加に関するサポート体制について、「ボランティア休暇」などの施策はあるものの、課題が残されているといえる。

また、増田氏はインタビューの最後に、大学および学生に向けて下記のように語っていた。

私が今思うのは子どもたち、ちょっと小学生になる子たち携わってるんで、あれなんですけど、小学校の学習指導要領も変わってきて、アクティブラーニングっていう主体的な、対話的な学びっていうのが - 中略 - 結局、私の解釈って簡単にいうと、こうしなさいっていう教育から、どうしたいっていう教育に変わっていくんだと思うんですよ、これから、こうだよって教えてあげるんじゃなくて、これとこれがあるけどどっちがいいっていうことを選択させてあげたりであるとか、その子がどうしたいってことを引き出してあげるような教育に多分変わってくと思うんですよ。だからこのボランティアっていうものを日体大で考えると、当時は私もある意味、受け身ですよ。こういうのもあるよ、やらないか。自分で探し出せたわけでもないし、作ったわけでもない。だから今の学生さんたちには、逆にボランティアを生み出してほしいですよ。大学側が全部、こういうのがあって持ってくるんじゃなくて、そのヒントになるちょっと材料だけ。学生が主体的にそうやって、ここ行きましょうよ、困ってる方、できることないですかねっていうのが出てくるような、そういう子たちがこれからの未来、育ってっ



てほしいですね。

清宮ほか（2021）の体育系大学生のスポーツ・ボランティアに対するイメージの類型化を試みた研究では、スポーツ・ボランティアをクラブ・サークルやゼミ活動から依頼を受けて行うものと捉え、社会にも自分自身にもメリットがないとイメージしている「義務型」の学生が26.4%と最も多かったことを報告している。増田氏も当時の自分のことを「受け身」と表現しているように、「義務型」の学生だったのかもしれない。しかし、スポーツ・ボランティアに参加したことで、かけがえのない経験とともに、「価値観の拡大」と「スポーツ観の変容」を得ることができている。清宮ほか（2021）は、「義務型」の学生に対する大学側のアプローチとして、「スポーツ・ボランティアの利他的や利己的な側面を教示する、もしくはスポーツ・ボランティア活動に強制的に参加させない組織づくり」の必要性を述べている。したがって、増田氏が提案している通り、大学側は、「学生がボランティアに主体的に参加できるような様々な材料を提供すること」学生側は、「ボランティアへの積極的な関与の姿勢を持つこと」が重要なのではないだろうか。

## 文献

清宮孝文・依田充代・門屋貴久・阿部征大（2021）

体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化：スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して。日本体育大学紀要, 50: pp.1019-1029.

小林章郎（2018）冬季パラリンピックスポーツのクラス分け。日本義肢装具学会誌, 34（1）: pp.11-15.

厚生労働省（2021）この経験がきっと力になる—ボランティア休暇制度を導入しましょう—。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課（2007）ボランティアについて。

内閣府（2020）令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査報告書, p.14.

常浦光希・田原陽介・山本孔一（2016）スポーツボランティアにおける学習成果の仮設モデルの生成—Jリーグボランティアを経験した大学生に着目して—。環太平洋大学紀要, 10: pp.211-216.

United Health Group. (2013) . Doing Good is Good For You: 2013 Health and Volunteering Study, pp. 1-11.

山下博武・行實鉄平（2015）スポーツ・ボランティアに関する研究動向—スポーツ経営学からの批判的考察—。徳島大学人間科学研究, 23: pp.39-55.

（受理日：2023年2月10日）